

都市再開発法制定・協会設立50周年記念講演 講演録
(開催日時：令和元年5月30日 15時40分～16時50分)

ヒューマンな建築を目指して

建築家 槇 文彦 氏

【略歴】

1928年東京都出身。東京大学工学部、ハーバード大学で建築を学び、後に両校で教鞭をとる。現在、槇総合計画事務所代表。

【主な作品】

ヒルサイドテラス、スパイラル、幕張メッセ、慶應義塾大学湘南キャンパス、京都国立近代美術館、刀剣博物館、4 ワールド・トレード・センター、アガ・カーン センター

【主な受賞歴】

日本建築学会賞、朝日賞、毎日芸術賞、高松宮殿下記念世界文化賞、プリツカー賞、UIA及びAIAのゴールドメダル、文化功労者

【主な著書】

「記憶の形象」(筑摩書房)、「残像のモダニズム」(岩波書店)、「漂うモダニズム」(左右社)、「Nurturing Dreams」(MIT PRESS)、「アナザーユートピア」(共著、NTT出版)



只今ご紹介いただきました槇でございます。今ご紹介ありましたように、建築を志してから70年ぐらいたっているわけですが、私が若いときというのは、東京大学では丹下先生、ハーバード大学はホセ・ルイ・セルトという方、この人は有名なアーバニストでCIAM^{※1}のチェアマンをやった方です。それから、1960年代にメタボリズムに参加いたしまして、ここに当時の我々のメンバーの写真があります。そして、また、ちょうど1960年にヨーロッパでTeam10^{※2}のメンバーにもお会いする機会がありました。ここに非常に強くつながっているんです。

丹下先生は我々若い建築家と交流があって、その中心にいたのがル・コルビジェであったといってよろしいんじゃないかと。世界で一番尊敬されている建築家、当時はですね、アメリカではルイス・カーンがいて、有名なのは、コルビジェはボウタイ(蝶ネクタイ)をしていまして、私も若いときはよくボウタイをしていたんですが、最近

ノータイ、そういう我々の若いときの時代であって、ということです。

※1 CIAM: Congrès International d'Architecture Moderne、シラム、近代建築国際会議。建築家たちが集まり都市・建築の将来について討論を重ねた国際会議。

※2 Team10: 第9回近代建築国際会議CIAM(1953)において結成された、アリソン&ピーター・ミッソン夫妻を中心とした若い世代の建築家グループ。

1. ヒルサイドテラス 1969—1992 東京都渋谷区

最初にご紹介するのはヒルサイドテラスです。私は1955年にハーバードを辞職しまして、日本へ帰ってきて仕事を始めました。なぜ日本へ帰ってきたかという、メタボリズムで黒川さんとか菊竹さんがどんどん仕事して、自分も遅れないほうがいいということで帰ってきて、そのとき68年、ちょうど69年にできたのが代官山のヒルサイドテ



with Kenzo Tange

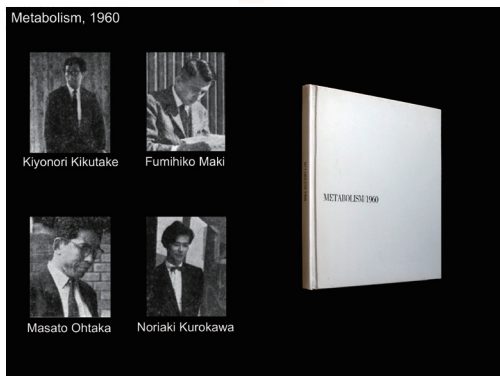
through the CIAM congress



with Josep Lluís Sert



Le Corbusier



Metabolism members, 1960



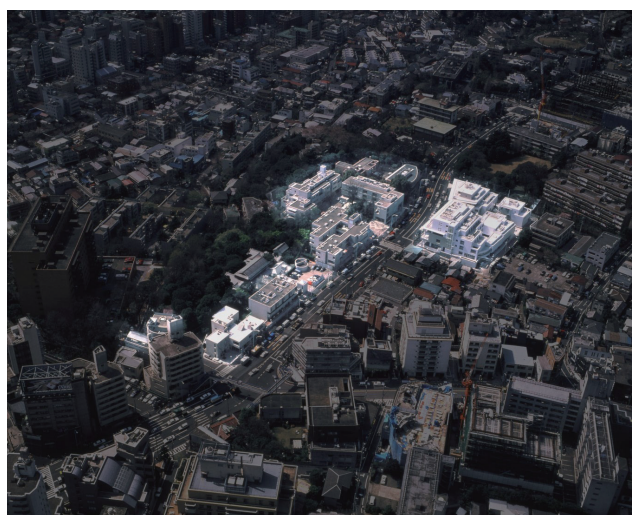
Team 10 meeting, 1960

ダイアグラム

ラスであって、当時は旧山手通りも非常に静かな住宅地でありまして、これができてちょうど今年で50周年ということで、この秋にヒルサイドテラスで、1期だけでなく6期までを記念してちょっとしたエキシビションをやることになっております。11月8日から12月8日まで一月やります。

これがその全貌であります、奥のほうに旧朝倉邸もありまして、現在、これは渋谷区が管理して、ちょっと庭とか古い日本の朝倉邸、これは重要文化財に指定されまして残しております。これが今お話しした1期、それから2期、3期、それから、こちらに私のやりましたデンマーク大使館、これが5期、6期、これらができるまでにちょうど25年かかりました。

これが全体の姿でありまして、ここは一種住専で、当時は高さがこの左側のほうは10メートルに抑えられておりました。容積率も150%。なぜこうなったかというのは、この我々の施主でもあ



ヒルサイドテラス 全景 ©ASPI

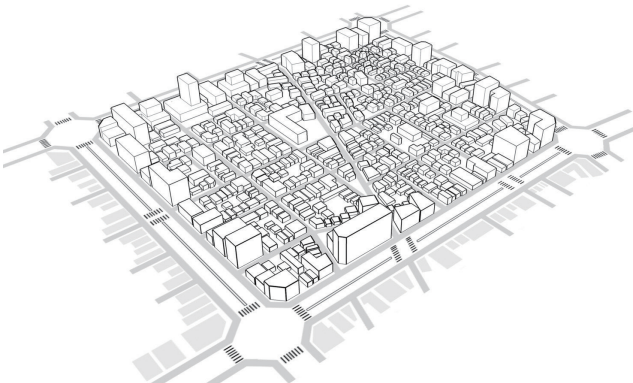
る朝倉不動産の先々代が、やはりこれからの東京はもっと立派な道をつくんなきゃいけないということで、相当ご自分の持っておられた土地を提供して、ここは広くなったんです。しかし、同時に、

だからといってここが高密度、高さも高いものが建つことはやめたほうがいいんじゃないかという政治家もありまして、朝倉さんの先々代も当時の市の政治をやっておられまして、そういう二人の方の意見によって、ここにこういう姿で、道が広い割に密度の低い建物が25年、6期にわたってできるということになったわけです。

大体第3期ができたときに、朝倉家と話し合っ、ただ単にここが店舗と住宅であるのはつまらない、少し文化施設も持ってきたらどうだということで、この赤い点にありますところが、例えば4期の地下はちょっとしたホールになって音楽会ができる。こちらのほうは少し本格的なギャラリーができる。そのほかに、そういうようなアクティビティに貸したりするようなことができるというようなことが幾つかその後行われまして、したがって、ヒルサイドテラスに来るのは単にレストランや店舗に、あるいは住んでいるだけでなく、そうした文化活動の核としてもかなり盛んに精力的にやっているという、東京では珍しい一つの内容を持ったところですよ。

これはバリー・シェルトンというオーストラリアの都市計画家が「日本の都市から学ぶこと」という本を書いたときにこういう図面を紹介しています。これは、今お話をしたように、どちらかというと立派な道に沿っては高い建物ができると、しかし、中のほうは古い狭い道で、どちらかというと低い建物がある。決してこれはスラムでもなんでもない。

私はこれを「皮とあんこ」という名前をつけまして、ヒルサイドテラスが非常にユニークなのは、立派な皮に直接こういう建物じゃなくて、あんこが出てきていると、そういうふうにいっていいん



バリー・シェルトン（都市計画家）によるスケッチ

ではないかと。

ですから、今のヒルサイドテラスは幅が22メートル、歩道も含めてありますが、普通ですとこれぐらい高い建物が建ってしまう。しかし、建っていない。これが今のヒルサイドテラスの姿であるということで、そういった意味でのユニークさがあり、これからの東京の中では、どっちかというとアップグレードしていく方向でなくてダウングレードしていくと、ヒルサイドテラス的なものができる可能性が高いと、そういうふうにいっていいのではないかと思います。



普通あり得る高層の周縁

ヒルサイドテラス

ですから、私どもは、この中で幾つかの小さな広場をつくろうと。これがブルーで示されて、それぞれ皆、少し違う形でオープンスペースがあって、それを取り巻いて店舗とかレストランがある。したがって、同時に、ここの旧山手通りに沿った建物の高さは10メートルとし、北側の第6期は後にアップグレードされて20メートルまでいいことになったのですが、少なくとも旧山手通りに沿っては10メートルとするというようなことが、このアーバンデザインの一つのルールとして存在させたということです。

ですから、これが第2期で、これが第2期の広場、それから、第3期は小さな神社が、丘があって、その周りに建物がある、これが第6期のところで、後ろのほうは、先ほど申しましたように高くなっていますので、少なくとも旧山手通りに面するところは10メートルで抑えてあるというように、立派な道がつくと、やはりそこへ来て住みたいというのか仕事をしたいという人が今でも非常に多くなっていますが、同時にヒューマンなスケールを保ってこようと。

最近ここにありました歩道橋がやはり我々の意見でとられまして、今いったこういう形になっております。ですから、これは第6期を裏のほうか

ら見た姿ですが、樹木みたいなもの、あるいは建物のガラス面とか、さまざまな層をつくってきて、全体像に奥行きを見せているということがいえると思います。



ヒルサイドテラス 第6期の広場を後方よりみる

これはUCLA（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）が、割と著名な世界中の建築家に対して、一体どの建物が20世紀にできた中で、若い建築家や学生がぜひ見るべきであるかというものを調査したものです。決して美しいとかそういうことだけではない、つまりは学ぶべきものという表をつくりましたが、一番上にミース・ファン・デル・ローエのバルセロナ・パビリオン、その次にヒルサイドテラスがコルビジェのサヴォア邸などと一緒にこのような表があります。こういうのを見ていただいても、ヒルサイドテラスがかなり国際的にもある評価を得ているということがいえると思います。

ヒルサイドテラスに続くT-SITEをご存じだと思いますが、大きなTSUTAYA書店がありますね。ここが再開発されたときに、我々はヒルサイドテラスの一員として、この敷地内にある大きな木はできるだけ残してほしいということを強く要請しました。その結果、これをやったライン・ダイサムという建築家は建物全体を後退させてくれた。その結果、出来た歩道との間のすき間でみんなお昼なんかお弁当を食べたり、あるいはちょっとした憩いの場所も手前にできまして、ヒルサイドテラスと続きにこの道を歩いていくと非常に楽しい、そういう空間ができました。このように、周辺にまでそうした楽しさ、深さをつなげ

ていった非常に数少ない例の一つでありまして、ここは非常に人がにぎわっておりまして、ヒルサイドテラスが静とすると、こっちが動でというようなことがいえると思います。

2. 風の丘葬斎場 1997 大分県中津市

一つお見せしたいのは、1997年に大分県の中津市に風の丘葬斎場というのを市長に頼まれて設計しました。このとき、ご存じのように葬斎場というのは、煙が出たりなにかあまり周りから好まれる施設ではない。しかし、市長がここに大きな公園を前につくって、むしろ公園からはあまり葬斎場であるということを見せない形のデザインにして、そういうことで、公園に来ている人は実際そういうことを考えなくて済むような場所をつくって欲しいという要請がありました。

これが葬斎場で、入っていくと玄関があって、ここで最後のお別れをして、1時間ぐらい待つと遺体が灰と骨になって返ってきて、それを皆が白いつぼに入れて持って帰る。ここにはちょっとし



風の丘葬斎場 全景 ©北嶋 俊治



風の丘葬斎場 入口 ©北嶋 俊治

たお墓があって、それから、古い遺跡の跡を我々のランドスケープアーキテクトと一緒に、ちょっとしたパターンのようなものにしました。ですから、ここは非常にみんな低く抑えて、ランドスケープの地面を上げてきて、そうした葬斎場を感じさせないものにすることができました。

これが入ってきたところで、この向こうにスクリーンがありまして、それを通して右側に行く。それから、ここが最初のお別れをするところとして、その向こうにメインの最後のお別れをするところがあるわけです。この真ん中に人の出れない、ただ、その光と、それから木と空だけをアプリシエイト(認識・評価)する中庭がありまして、ここでお別れが済んで、遺体がクリマトリアム(火葬場)に行きますと、その間に1時間ぐらい待たなきゃいけない。そういう場所が後ろのほうにあります。そして、待っていると、ここが最後にお骨と灰が、親族とか親しい方がここで残っている白い皿に分けて、帰っていく。そういう皆さんもご存じのあれなんですけど、これは非常に評判になりました。私が中津に行くと、みんなから、これで我々も平和に死ねますということをおいわれ、自分の長い建築家人生で最大のコンプリメント(お褒めの言葉)であったと思います。

やはり今の葬斎場、東京なんかですと非常に大きくて、一度に何骨もそこであれされる、そういうようなところ、あるいは、古いシャビーな(みすばらしい)葬斎場に対して、最後のお別れの時間をゆっくりとアプリシエイト(認識・評価)することができるのがよかったのではないかと思います。

これが今申しましたように、少しターフ(芝生)が上がっていて、向こう側に建物の一部が見えている。公園に遊びに来る人たちは一切葬斎場の存在というものを知らなくてすむ、これも一つの再開発ではなかったかと思っています。

3. 横浜アイランドタワー 2003 神奈川県横浜市

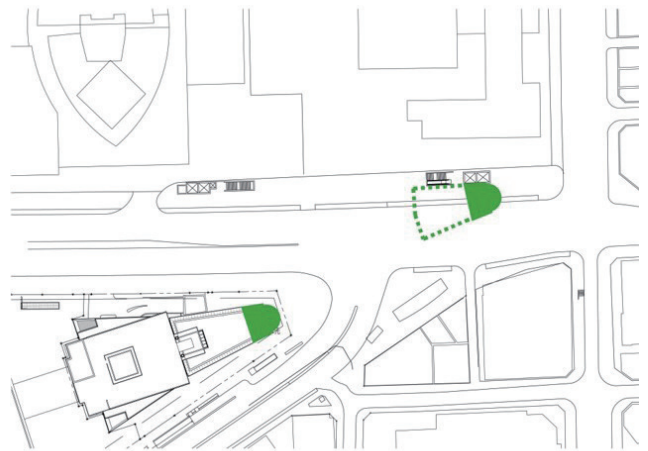
これは2003年に横浜にアイランドタワーというのを建てまして、当時ここには古い銀行の建物があったわけです。ところが、ここに新しい道路をつくるということで壊さなきゃいけない。その結果、銀行の正面、この部分はそのまま持っていく。

それだけでも何億円ってかかったと思うんですが、やっぱりバブルの初めで、じゃ、いいですよということになりまして、そして、後ろのほうの部分はちょっと持ってくるのが大変ですから、後に再生しました。

よく今あるように何かファサード(外観)だけ昔のものにして、中は全く変えてしまうということをしなかったのが、ここに見ていただくとわかるように、新しい三角形の土地にこういうふうなオフィスビルと、それから、古い銀行の建物、これは今、市が管理してしまっていて、この中は様々なパブリックのスペースになっております。

例えば、かつて銀行の窓口をしていたところは再生しまして、いろんな会合が行われ、私もここで講演したことがあるのですが、こういうふうに古い建物をそのまま再構築して、しかし、利用方法はよりパブリックなものに仕上げるという一つの珍しいケースだったと思うんですね。

これがアイランドタワーで、その後、その後ろ



旧第一銀行横浜支店の保存・移転



旧銀行窓口の再生

にある敷地に対して市がいろんな興味を持って、我々は少しスタディーしたことがあるんですが、今ここにお見せする、これがお見せしたアイランドタワー、その後部にデザインビルドのコンペがありまして、幸い我々の案が採用されまして、現在工事中で、横浜市新市庁舎が来年の春過ぎぐらいにできます。古い市庁舎のほうは、村野藤吾先生の作品で保存されるという方向で進められていまして、市庁舎の機能は全部こちらのほうに移ります。

4. 横浜市新市庁舎 2020 神奈川県横浜市

ご存じのように、川に面した非常にいいところで、桜木町の駅がここですね。今建設中で、これは模型ですが、タワー、それから議会棟、下のほうは比較的パブリックにオープンなスペースにして、ショップとかアトリウムとかそういうものが入り、その隣がアイランドタワーです。

こちらから見ますと、できるだけ川に向かってにぎわいのある場所をつくろうということで鋭意施工中であります。川を渡ると桜木町の駅があって、敷地の下にメトロがあり、直接アトリウムに上がってこれる、そういう場所でもあるわけです。

これが工事中の現在でありまして、一応来年の夏、オリンピックの前にこれが開庁するというようになっております。施工も順調に進められています。

これはまだCGですが、先ほど申しましたこちらのアイランドタワーとつなげるアトリウムがありまして、ロビーがあります。この下をおりてい



横浜市新市庁舎 竣工イメージ



横浜市新市庁舎 内観イメージ

くと地下鉄があり、そして桜木町からの橋がかかって、ここから市庁舎内部の下、あるいは上へ行けるようになり、店舗もあります。

5. 東京電機大学東京千住キャンパス 2012・2016 東京都足立区

これは、我々が一番最近に設計しました大学キャンパスで、東京の北千住にあります。近くが北千住の駅ですが、ご承知のように東京電機大学は神田にばらばらに敷地を持っていて、それを売却しまして、ここで統合するというところで、2期にわたって、2012年に第1期、2016年に第2期が完成しています。

このキャンパスの特徴は、足立区の非常に強い要請もありまして、キャンパスには門も、それから壁、塀もない。自由に市民の方が1、2階は通り抜けられるようにしてほしいという要請を実現したものです。我々も非常に賛成しまして、そういうオープンな大学をつくったわけです。

北千住の駅に向かって、敷地の真ん中に公道が通っています。もとは、これは日本たばこの工場と勤める方が住む場所であって、塀に囲まれてい



東京電機大学東京千住キャンパス 外観 ©北嶋 俊治

ました。ですからこれまでは、周りの人はぐるっと回らなければならない、そういうことのないキャンパスをつくったわけです。

これがちょうど公共の広場に面したところで、ここに「イタリアントマト」という割と著名なところへ積極的に大学がアウトソース（外部委託）して、手前にロτζア（回廊）というちょっとした都市の部屋みたいなものをつくりまして、住民の人がここへ来て休むこともできる。あるいは、大学の学生さんがちょっとした音楽会をやるとか、いろんなことができるのがこの場所です。左のほうにありますのが、イタリアのボローニャなんかにあるアーケードの下にさまざまな活動のできる場所をつくっていますが、同じことをここで再現して、ここでは周りの人が来て、休んで話をしている、あるいは先ほどお話ししましたように音楽会をやることもできるそういう場所にしたいわけです。

ですから、時々何か大きな催し物があれば、こ

の壁を使ってそれを掲示することもできるし、そんなふうな大学の顔でありながら、同時に足立区も使うし、いろんな人が使える、そういう場所にしたいわけです。

この中で我々が予想していなかったことが一つ起きました。中央に西側と東側の間に大きな広場をつくったんですが、保育所の先生が連れてきて、よくここで遊んでいるわけです。大学のキャンパスに子供が来て遊ぶということは、やはりそれだけ都会ではオープンスペースが足りないのじゃ、近くの大学を使わせてもらおうということなのですね。

これを見てわかるように、丸柱がみんな好きなんです。これは恐らく子供のときにお母さんに抱かれたりした思い出が丸柱にある。ですからよくこの写真を若い建築家に見せるときには、保育所や幼稚園をつくるときは、四角い柱じゃなくて丸柱にするといいですよといっています。我々もこういう光景を通して人間のビヘイビア（行動）、



東京電機大学東京千住キャンパスのロτζア



イタリアのロτζア



近隣の保育所からの子供達



市民によるお祭りの風景

何が好きなのかというようなことを知るわけです。

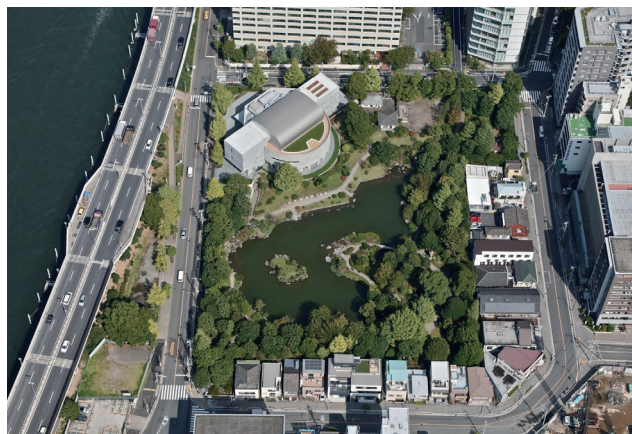
例えば、子供はやっぱり丸が好きなんです。これは国際仏教大学に仏教のシンボルのようなものを庭につくったら、いつも子供が来て、この丸い彫刻の中で遊んでいる。ですから、建築というのは、やはりつくったものを追跡するといいますか、そこからいろいろ我々は学ぶということが非常に多いのではないかと思います。この真ん中の公道のところは、市民の人が来て、こういうときにお祭りのみこしをもって練り歩くという、こういう風景も展開しています。

一部のメディアによりますと、北千住と赤羽は、今、東京で一番バイタリティのあるところで、それは単にこの東京電機大学だけでなく、たくさんの大学を足立区が誘致するのに成功しまして、そうした若い人たちと、住民とのいろんな形の交流でシナジーが生まれてくるということがいえると思うので、我々としても非常に思い出のあるプロジェクトになりました。

6. 刀剣博物館 2017 東京都墨田区

これは一番最近、東京に我々が設計しましたのが刀剣博物館です。これは両国の国技館のすぐ東側にある安田庭園にかつて墨田区の公会堂がありました。これが廃館になり、そこに刀剣博物館にちょうどいいからといって移転に来ることになりました。前面は公園で、敷地はこの後ろのほうだけで、非常に狭隘なので、できるだけ旧い建物の形をそのまま残しながら新しい建物をつくったわけです。

これは見ていただくとわかりますように、刀剣博物館は非常に安田庭園を意識し、下からもよく見えるし、この上へ来ますと、ここからすばらしい俯瞰した庭園の光景を見ることができるわけです。最上階には刀を展示する博物館があります。玄関から中に入りますと少しやわらかい丸を中心にした造形があり、その向こうの安田庭園が見えます。隣にはちょっとしたホールがあります。最上階では国宝級の刀も展示されることが多いということでもあります。やはり刀をきれいに见せるためには、光の具合というのが非常に大事でして、実際にできる前にモックアップ（実物大模型）をつくりまして、光の具合を見せるように工夫しま



刀剣博物館 全景 ©北嶋 俊治



刀剣博物館 展示スペース ©北嶋 俊治

した。

こちら辺までが、日本のどちらかというところと近年やりました再開発をご紹介いたしました。

7. スパイラル 1986 東京都港区

ここはご存じの方もいらっしゃると思いますが、1986年にスパイラルという建物ができて、これは当時としては非常に珍しいハイブリッドの建物で、いろんな機能が一つの建物の中に入っています。ご存じの方も多いと思いますが、1階がちょっとしたショップと、後ろのほうにエキシビジョンスペース、そこから上がってきますと、我々は「エスプラナード（遊歩道）」と称していますが、3階のホールに行くことができます。

このエスプラナードに椅子を置きますと、この部分に人がいつも椅子に座って本を読んだり、それから表参道を見ている、そういう光景に出会います。この建物は、できましてからもう40年たっていて、どんどん中が変化していますが、この風景だけは変わっていません。ここで恐らく皆は



スパイラル 外観 ©北嶋 俊治



スパイラル エスプラナード

孤独を楽しんでいるのです。今でも百貨店に行くと必ず椅子を置くと誰かが座っているけど、もうちょっといい形で孤独を楽しめるということは、我々、都市の空間をつくる時は非常に大事なことだと思うんですね。

これはヒルサイドテラスのカフェです。私の事務所が近いもんですから、行くと必ず同じところで中老の人が座っていて、彼はまず4分の1の赤ワインを頼む。半分終わったところにサンドイッチに手を出す、そして帰っていく。これはやっぱり、ここが比較的静かなところなので、自分の一番好きなところに座って、ヒルサイドの外の風景を見



ヒルサイドテラスのカフェに座る牧師

ながら一刻を楽しんでいる。一体彼は誰ですかと聞いたら、近くに住む教会の牧師さんですといわれました。ニーチェという人が、「孤独は私の故郷である」ということをいっていますが、私の大変好きな言葉で、それをもとに一寸エッセイを書いたので、彼の許可を得まして、その記事を彼の写真と一緒に送ってあげたら、非常に喜んでいました。

その後、行ってみると、いないんですね。どうしたんですかって聞いたら、最近お亡くなりになりましたということだったんですが、やはり都市というのは、そういう孤独を楽しみ、それとともに自分にとって小さな祝祭性のある行為であるということもいえると思うんですね。そんなようなことで、私の記憶に非常に残っている光景の一つです。

ですから、これはイスファハンという有名なイランの古都で、何回も行くチャンスがあったのですが、ここのすばらしいのは、実際幅100メートル



イスファハンのブルボール

ル道路なんです。しかし、真ん中にもう一つ、少し高く上がった歩道をつくりました。ここは長さが2キロぐらいありますかね。川まで続いています。こういうところも1人の人が楽しめるブルバール（街路樹のある大通り）をつくって、恐らく私が今まで見たブルバール（街路樹のある大通り）の中で最も美しいもののひとつであると思います。

8. 三原市芸術文化センター 2007 広島県三原市

これは三原市というところに芸術センターをつくりましたが、普通、大きなホワイエがそのこのホールについているものですが、ここでは非常に低く、ヒューマンな空間を公園に面したこんな形でつくりました。ここがホワイエなんですね。隣にレストランを構えて、ふだんはこういうところに市民の人が来て、何となしに空間を楽しまれ、さっきの牧師さんたちと同じです。



三原市芸術文化センター 外観 ©北嶋 俊治



三原市芸術文化センター ホワイエ

しかし、非常におもしろかったのは、ここでちょっとした音楽会をやったり、それから、なんと披露宴をやっている。ですから、人間というのは、空間を与えられると、建築家が考えていなかったようなことが次々と生まれてくる。先ほどの北千住の東京電機大学の子供の遊び場と同じように、建築家が考えてもみなかったことにいろいろ使ってくれるというのは、やはり我々建築家の楽しみの一つです。

9. アガ・カーン ミュージアム 2014 カナダ トロント

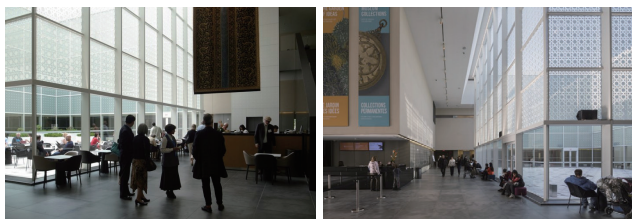
このあとは少し海外に行きますが、これはトロントにありますアガ・カーン ミュージアムです。これをつくったのは、2014年ですが、設計を始める前に、アガ・カーンというイズマイリーのセクト（イズマイリー派）の当主から5ページの手紙をもらって、そこで彼は、イスラムの建築というのは非常に自然光に対してセンシティブ（繊細）であるので、そういう建物にしてくれといわれました。もちろんこういう気候帯のところですし、石を外装に選びましたけど、できれば一番光に対してセンシティブ（繊細）な白い石を探そうと、2年間かかって「アルガリータ」というブラジルの石を使うことができました。ですから、ここでは光、2層の建物なんですけど、少し断面を屈折させて、違う色彩に、2層でありながら見せられるように考えたわけです。

この真ん中のイスラム的な庭園をつくって、こういう建物ができまして、ご存じのようにエキシビジョンを中心にしますから、外壁は余りたくさん開口をとることができない。したがって、真ん中にパティオをつくり、ここにいろんな催し物をすることもできます。

アガ・カーンは、外部から見たところはモダン



アガ・カーン ミュージアム 外観 ©Shinkenchiku-sha (2枚とも)



アガ・カーン ミュージアム 内観 ©Shinkenchiku-sha
(右側のみ)

に、しかし、中に入るとイスラムのデザイン、カルチャーが感じられるようなものをつくってくれないかといった話でしたが、この中庭ではパフォーマンスもあり、エキシビションもあって、なんとウェディング・セレモニーも行われたりします。ここにちょっとしたバーがありますので、何もやっていないときには、中庭で皆がコーヒーとかティーを楽しめる、そういうような場所でもあります。

ですから、中庭はできるだけイスラミックな雰囲気を持ったものにしようということでこういう床、ガラスのパターンもイスラミックです。2014年にできました。

アガ・カーンの建物は、最初にオタワ、次にトロントがあって、それからロンドンで3番目の建物を依頼されました。場所はキングスクロスという有名なステーションがあるところですが、周辺をどんどん再開発して、今ヨーロッパでは一番再開発が進んでいるところです。そこにアガ・カーンが自分のもう一つセンターをつくらうということになりました。

10. アガ・カーン センター 2018 イギリス ロンドン

これも白い建物で、ここはスペインの花崗岩を使用しています。外から外壁にパネルをはめ込む形式でできています。真ん中には数層の吹き抜け空間があって、ここにイスラムのパターンがずっと上まであります。

His Highness (殿下) の意向で7つのガーデンをこの建物の中につくってくれということで、そのうちの一つですね。イスラムではこういうオープンスペースは外の部屋という考えをもっているんです。ですから、これはある著名なランドスケープアーキテクトが作った中庭です。

我々も7つのうちの3つほど、イスラミックな



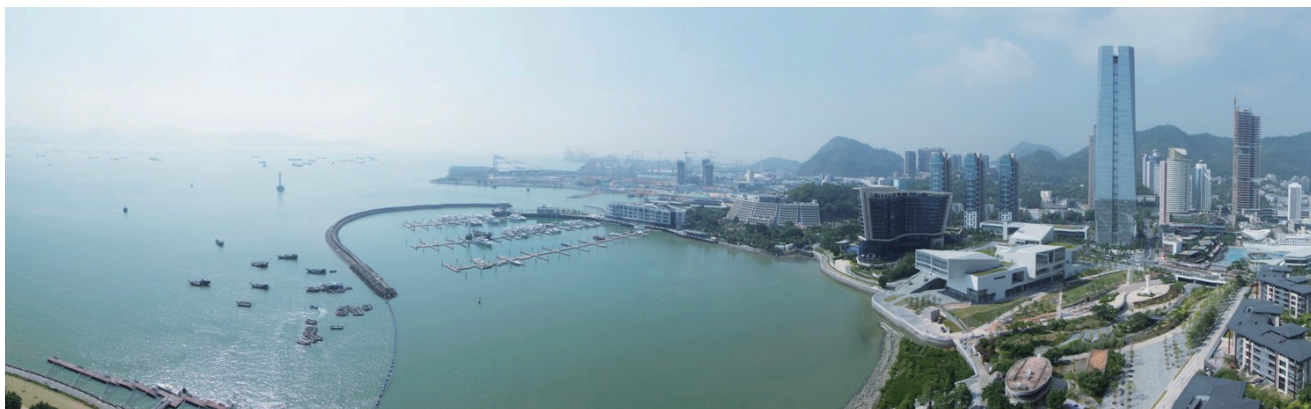
アガ・カーン センター 外観 ©Edmund Sumner



アガ・カーン センター 内観 ©Edmund Sumner



アガ・カーン センター 広場 ©Hufton Crow



深圳海上世界文化芸術中心 全景



深圳海上世界文化芸術中心 外観



深圳海上世界文化芸術中心 広場

ガーデンをデザインしました。

11. 深圳海上世界文化芸術中心 2017 中国 深圳

これが一昨年の春、深圳に新しく完成したシー・ワールド・カルチャー・アンド・アートセンターという施設です。これは、ご存じのように深圳というのは、日本でいう特区であり、かつて20年前は漁村だったのですが、今は1300万のハイテクの都市になっていまして、そこにこういう文化施設がつくられたわけです。非常にいい場所です。1つは、公園、それから海、それからマウンテンを見ることができる、そういう場所にこういう新しいコンプレックス（複合施設）をつくりました。このコンプレックス（複合施設）には、中にはミュージアムとか図書館とか、それからレストランなんかが入っていて、そこではお金を払うのですが、そうでないところは市民が自由に上がりたり下りたりすることができます。上から見たところです。3層の上に庭があって、ここから周りの景色を見ることができるわけですね。こっちが

海、公園、向こうに山が見えてくる。

おもしろかったのは、この写真は、できた翌日に我々が撮ったんですが、既にここに何かバンドがやっていて、みんなが階段に座って聞いている。あるいは香港島を見ている人もいます。これはもう一つの階段で、いろいろアートも置いています。みんながここで休むことができる、そういう場所をつくったんです。内部はエスプラナード（遊歩道）があり、ここも自由に人々が通ることができる。そういう場所をつくったわけです。ですから、この建物が開館した翌日、7,000人の人が来たそうです。

12. パトナ ビハール博物館 2017 インド パトナ

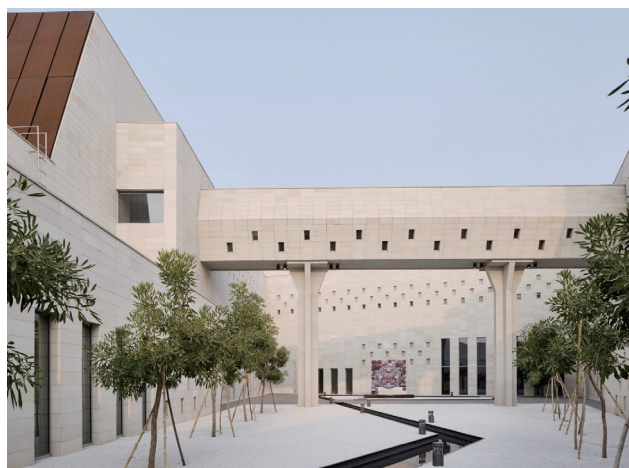
これが2017年、ほぼ完成したインドのビハール博物館です。パトナという名前は、ビハール州の州都の名前でして、ちょうどカルカッタとデリーの間に人口は100万ぐらいの都市なんです。敷地は非常に豊かでして、500メートルにわたった敷地がありまして、ここにありますように、イ



パटना ビハール博物館 外観



パटना ビハール博物館 コート（中庭）



パटना ビハール博物館 コート（中庭） ©Ariel Huber

インドは鉄を初めてつくったところなんですね。ということでコールテン（耐候性鋼）をエクステンシブ（広範囲）に採用しました。それと砂岩によって外部が構成されたのがこの建物です。

これが中央の入ってくるところで、別棟にチルドレン・ミュージアム、その反対側にメインの回廊性のあるギャラリーができました。実は2度、オープニングセレモニーがあり、現在全面的に開放されているんですが、部分的には完全にできていないんですよ。それが平気なのがちょっとインドかなという感じがしますが、中にすごくいい木が残っていて、そういうところを残しながらコート（中庭）をつくっています

インドは建物のメンテナンスがよくないところなんです。したがって、コールテン（耐候性鋼）と砂岩を使えば何もしなくていい。ですから、ルーバーも日本だとコンクリートの打ち放しかと思うのですが、ここでは全部石でくるのであるわけです。

子どものミュージアムがオープンしたときは、なんと1日3,000人ほどが来たんですね。日本だったら300人ぐらいかと思うんですが、人口が多いところですから、やはりそういう人というものがつくり出すバイタリティがある訳です。それとあと、非常に自然光が強烈なところです。



4 WTC ©Tectonic

13. 4ワールド・トレード・センター 2014 アメリカ ニューヨーク

これが2014年に私達が手がけました4ワールド・トレード・センターです。この全体像は、このプロジェクトがパブリックになったときにニューヨークタイムズがつくったCGです。これがナンバー1、2、3、我々は一番低い建物を4番目につくりました。

ある日、私の知人がニューヨークから電話があって、一つやってみないかと誘いがありました。これはコンペでもなんでもないんです。少し考えて、一番小さい建物をやらせてくれと言ったのがナンバー4です。かつてあったワールド・トレード・センターの位置は、水のあるサンクンガーデンになっています。

みんなの案を持ち合って発表したときの写真です。右側から順にロジャース、フォスター。次がマスタープランナーのリーベスキンの、隣はパタキという当時のニューヨークの知事です。そして我々のクライアントのシルバースタインと私です。



1WTC + 4WTC



このイメージでは4WTCが光の反射の関係で消えている

我々の建物は幸い新しいメモリアルパークに直接面して、地下から電車あるいはメトロの入り口があり、大きなホワイエがありまして、背後に最近やっと完成したのですが、メトロからの上り下りができるウォールストリートにつながっている空間があります。

建築はガラスの彫刻をつくろうということでした。今はスマホが多いので、いろんな知らない人が写真を送ってくれます。我々のナンバー4は時々見えなくなる。それは日光の関係です。これは誰かが送ってくれた写真です。

では、この後はちょっと動画フィルムをお見せします。

(ビデオ上映)

2001年の9月11日には、私はちょうどセントルイスで仕事していて、カンファレンス（研究会・協議会）をやっていたら、セクレタリー（秘書）

が入ってきて、何かニューヨークで飛行機のアクシデントがあったと報告してくれました。しかし、2番目のアクシデントにより、これはテロだということになって、直ちにカンファレンス（研究会・協議会）が終わりになって、どうやって日本へ帰ろうか、飛行機は全然飛んでいない。大学の厚意で車でシカゴに行って、3日後に東京へ帰れた、そういう思い出があります。ですから、そのくらいナイン・イレブンというのは大変な事件で、当時数日間、アメリカの飛行機は全部止まるというような状況だったわけです。

ここでお見せしたように風の丘葬斎場で、我々は平和にこれで死ねますというコンプリメント（お褒めの言葉）をいただいたのですが、ニューヨークでは知らない人が、やはりこの建物はここで3,000人の亡くなった人の魂を写し出しているのではないかとってくれました。やはり建築というのは、普通の人が何を考えてくれているのか、そういう言葉が非常に大事だったということを申し上げました。

これは私が数年前、ちょうど友人のいるマドリード、そこには真ん中にサンティアゴという有名な広場があって、この前がオペラハウスです。そこに小さなスクリーンがあってみんなそれを見ているんですね。一体これは何だって聞いたら、実はベルディのオペラを、ドミンゴが歌っているという返事でした。ちょっとおもしろかったのは、ドミンゴの歌をただでみんなが楽しんでいる。

そこで思い出したのは無償の愛という言葉です。皆さんご存じかもしれませんが、英語では「unconditional love」といって、これは聖書にもよく出てくる言葉なんです。無償の愛ということは、何も報酬を求めない好意を無償の愛で、日本でも時々テレビで出てくる言葉ですが、それに対して有償の愛ということもあるんじゃないか。

これは1958年に私がアテネに行ったときに撮ったパナティナイコの広場と後方の競技場です。ここで初めてオリンピックが行われ、その後いろいろ手を入れています、1958年に撮ったこの風景



マドリードのサンティアゴ広場



アテネのパナティナイコの広場と競技場

は今でも同じです。これだってただでみんな見れるんじゃないかというようなことがあるかもしれませんが、これもやっぱり無償の愛の一つ、完全ではないけど、行為の一つだと思います。

これが先ほど言いましたように、空間というのは、そこで誰もが楽しめる、そういう場所でありたい。したがって、文化活動はできればそういう無償の愛に近いものに近づけたい。当然我々は建築家ですから、施主の有償の愛から始まるんですが、できるだけ無償の愛、誰もが楽しめるものに近づけていくということが我々建築をつくっていく上で非常に大事ではないかと考えます。これで私の話を終わらせていただきます。ありがとうございました。